



Publishing house: 2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2017.02.01

共に是れ凡夫ならくのみ

鈴木大拙館館長 木村 宣彰

ご縁

今ほどご紹介をいただいた木村でございます。十四年間ですか。えらく長い間お世話になりました。本当に縁というものが尊いものだということを最近はずくづく感じています。

「お会いする度に申し上げているかもしれないけれども、因、縁、果、原因があつて縁があつて結果があるのですけれども、その中で「御」の字がつくのは縁だけです。ご縁というでしょう。因にも果にも「御」の字は付かない。経済界の方

ならば、結果のところに「御」の字

をつけると思えますよ。「御果」とか。儲からなかったらどうにもならないということでしょう。一神教の方々だったら、神様がこの世の中を全部造っているのだから、因の方に「御」の字を付けられると思いますよ。「御因」と。私たち仏教徒はそ

「さようなら」という挨拶の言葉、これはものすごく不思議なことではないですか。「左様であれば」ということでしょうか。「そうであれば」「バイバイ」というのと全然違うでしょう。「そうであれば」と言つて別れるとは一体どういうことですか。今日ご縁をいただいて、皆さんのお顔を見て、お話を聞いていただいて、そして、この因縁によつて私が失礼するという時に「さようなら」と。イスラム教だったらこれは神様の命令ですから、これはそんなことを言わずに決まつているのです。イスラム教の人たちは結婚するのも、縁が切れるのも、それは神様の申し召しだとか言うのでしよう。でも私たちはそうではなくてご縁だと。この考え方はとても尊いと思えますよ。皆んなそういう考えになつたらお互いに協力しましょうとなると思う。とにかく私は十四年間もご縁をいただいて、その度に縁ということを感じさせていただく。

大切なことを「勿体ない」という

でしよう。ただ経済的にモノを大事にしなさいよということだけが勿体ないということではなくて、ここにイスがあるでしょう。単に腰掛けを作るために様々な人が力を合わせてここにこのイスがあるのでですよ。ただお金で買えるモノではないですよ。ただお金の買えないというこの精神ではないかと思うのです。

神様、仏様に対して勿体ないという言葉を使うでしょう。これには見えないけれども何かそこに尊いものがあるということを感じとつた時に勿体ないと。ごはん粒一つも大事。お米を作るのに様々な苦勞があるんですよ。太陽の光、水、肥料、大地・・・色々なもののお陰でできている。そこにははかりしれない縁がはたらいておる。その年に太陽が照らなかつたらお米ができない。水がないと出来な

い。お米は八十八の作業があつてできるのだというでしょう。それがお米一粒の中にこもっていますよということ。だから単なるモノでは

ないですよ。その中に様々な因縁が関わっている、心がこもっているということを私たちの先輩は「勿体ない」という言葉を使ってきた。豊かになつたら「勿体ない」ということを教えるのが難しくなってきたわけですよ。いくらでも沢山あるわけですから、そんな不潔なモノは捨てなさいとなつて、食べられるご飯をど

きり捨てなければならぬということになる。輸入するのと同じくらの食品を廃棄しているわけでしょう。そのような経済的な問題よりも、このイスもホワイトボードもあらゆるものが様々な縁によってできていくんです。そのことを感じ取る。これが勿体ないということの大本ではないでしょうか。

「いただきます」もそうでしょう。お金を出したのだからもらうのは当然だと、これは売買の世界。それではなくて頂きます、頂戴します。これはみんな縁の思想が背景にある。元を辿ればお太子さんですよ。和国の教主なのです。日本へ仏教を伝えていただいた大本。その恩徳、

広大ですよ。はかりしれない位の恩徳をいただいている。だから親鸞聖人はそのことをあれだけの聖徳太子のご和讃を作つていただいで私たちに教えてくださっている。

末法の時代

聖徳太子が亡くなったのは西暦でいうと六二二年の二月二十二日です。そして奥様が亡くなったのが同年の二月二十一日だった。だから一日違いで亡くなつておる。もう五、六年すると、お太子さんが亡くなられてから千四百年になる。是非とも浄光寺さんのお太子さんのお勤めに私も元氣であればお参りしたいと思つております。

先ほど、ご和讃を頂かれましたと思いますけれども、七高僧を讃嘆されたご和讃がずっとあつて、その一番最後のところに親鸞聖人は聖徳太子のことをお書きになられた。インドの龍樹菩薩、天親菩薩。中国の曇鸞大師、道綽禪師、善導、日本の源信、源空、七人の高僧を紹介してそれぞれご和讃で讃嘆された。その高僧和讃の後にこのように書いてあ

る。「敏達天皇元年 正月一日誕生したまう」（真宗聖典五〇〇貢）と書いてある。インド、中国、日本の七人の高僧、これはよくわかる。その後のところに、お坊さんではない聖徳太子がでてくる。さらにその後にもこのように書いてある。「仏滅後一千五百二十一年に当たれり也」（同上）。仏滅後、お釈迦様が亡くなられてから何年経つかずと計算なさつたわけです。なんでこんなことを書かなくてはならぬのか。お釈迦様が入滅されて聖徳太子が誕生されるまでにちょうど一五二一年経った。要するに末法の時代に入つて二十一年目だと、こういうのです。

ご存知のように正法、像法、末法とこう続いてまいりますね。正法の時代というのは仏法の教えがあつて、その教えの通り修行をして、そして悟りが開ける。教行証が揃つている時代が正法という。像法の像というのは形でしょう。鈴木大拙館の近くに大拙先生の銅像があります。やはり先生のお姿とよく似ておるから銅像という。像法というのは正法とよく似ておるけど、ちよつと違う。

何が違うか。教えがあつて、行があるけれども悟りが得られない。外から見るとお経を読んで、修行をしておるけれども、なかなかご信心が得られない。やつていることは似ているけれども肝心が違う。これを像法。正法と像法の時代が終わり、末法になるともつと酷い。教えはあるけれど、教えの通りに仏法をいたたく人がいない。だとすればそれにはその時代に合うような教えがなくちゃいけない。

聖徳太子さまは、末法の時代に入つて二十一年経つた時に出ていただいた。しかも我々の日本に出ていただいた。だから親鸞聖人は和国の教主、日本の国の教主とおっしゃる。インドではお釈迦様だけれども、末法の時代になつて日本に出てこられた仏様がお太子さまだと。正法五〇〇年、像法一〇〇〇年が経つて、いよいよ末法の時代に入つてしまつた。そして二十一年。親鸞聖人が計算されて高僧和讃の最後のところになつた。わざわざお書きになつたのは、そのことをはつきりさせたかった。そして日本に出ていただいて、仏法を広



宮田 兎和子

めて、さらに憲法をお作りになった。その憲法の中に、「篤く三宝を敬え」、仏法をいただきましようというのでしよう。その当時、日本にはいろんな神様の教えもあったけれども、そうでなくて仏法が尊いんだということはどうしても伝えなかった。親鸞聖人は、像法が終わって、末法の時代に入って二十一年経ってこの世にご誕生になられたということが感動だったのですよ。末法の時代に仏法に出会えたことが感動だったんですよ。だからこの高僧和讃のところに書いていただいている。

十七条憲法

当時は勿論ですが、今の時代にお

太子さまの憲法を読むと、なるほどという思いがしますね。皆さんにも機会がありましたら是非一度読んでいただきたいです。ここに真宗聖典がありますけれども、一番最後のところにも『十七条憲法』が載っております。

今日のニュースを観ておつても憲法を巡って色んな意見があるわけですから、もしこの憲法をお読みになったら全然違う受け止めになると思うのです。十七条憲法の一番初めは「和を以て貴しとなす」、仲良くしましょうとこう言っているわけですから、そして十七条の最後はこういうことが書いてあります。「夫れ事独り断むべからず。必ず衆と論うべし。」(真宗聖典九六六頁)。何か大切な事を決めようという時に独断はいかんよと。「必ず衆と論うべし」「論う」というのは、みんなで議論して決めましょうということ。これが今大事じゃないかなと思うのです。

最初の第一条は、和が大事ですよと。諍いしておつたらまとまりませんから、和というものが大事ですよ。人間、放っておくとオラがオラが、

私が私となるから、皆んな和というものが大切ですよ。最初は和で始まって、そして最後の第十七条は一人で決めたらダメですよ。独断はいけませんよ、みんなできちんと言論してまとめましょうよと。

この憲法を改めて読みましたら文章も素晴らしい。内容も素晴らしい。四天王寺で教えていた時は憲法の試験問題を出していたものだから、これを憶えておきなさいと知識だけの問題だったけれども、今読むと全く違う目で見えてくるのです。

第一条が「和を以て貴しとなす」で始まる。そして「忤うること無きを宗とせよ」と。和がなかったら何事も成り立たない。

ある本にはこう書いてある。商売を始めようと思ったら時期というものがありますね。それは時の利ですよ。しかし、お店を出しても誰も人がいないところだったら、それを地の利がないところかどうか。時の利、時代にヒットするかどうか。地の利、場所が良いかどうか。どちらが大事である皆んな議論しているんですよ。時

の利よりも、地の利よりも何よりも大事なのは人の和だところ書いてある。いくら良い時期にいくら良い場所で商売を始めても、人の和がなかったら成就しない。それはそうですよ。銀座の真ん中にポーンと出店して流行のモノを売っていても、お店の中で諍いしておつたら、皆んな行かなくなりますよ。だから和というものがとても大切ですよ。

共に凡夫

十七条の「論う」、今は論うという悪いように使うけれども、皆んな思いを出し合って意見をまとめましょうということですよ。

そして第十条。これも尊い条項なのですけれどもね。第十条にはこういうことが書いてある。「忿りを絶ち、瞋を棄てて、人の違うことを怒らざれ」(真宗聖典九六五頁)。誰でも腹が立つわけですよ。その怒りについては聖徳太子は「忿」と「瞋」、両方共「いかり」なんです。でもこの怒りを二通りに分けておられる。この第十条の条文を読むとね、仮名が振ってある。

最初の「忿」は「こころのいかり」。顔には出さないけれども心の中で腹が立っている。それが「忿」。「瞋」は「おもえりのいかり」。自分が思い通りにならないから怒りを外に出す。その両方の怒りを棄てて、「人の違うことを怒らざれ」と。自分と他の人たちが自分と違うことがあったとしても、こういう怒りも、ああいう怒りもなく、お互いに仲良くしましよう。何故ならば、共に凡夫だから。

私が偉いと思うから、他の人が何か言ったら、「偉そうに」とこうなるわけでしょう。偉そうにと言ってる人の方が本当は偉そうなだけけれども、自分が偉いと思っていると、他の人が意見を言うと「何を偉そうに」と必ずそうやって諍いが起こる。そんな偉い人はいませんよと第十条に書いてある。「我必ずしも聖に非ず。彼必ずしも愚かに非ず。共に是れ凡夫ただひとならくのみ」(同上)だから「忿」だったり「瞋」だったりそういうことをやっちゃいけませんよと書いてある。

第一条〜第十条〜第十七条とずつ

と和というものが、しかも自分がいくら偉いと思っても勝手に決めないで、みんなで議論しなさいと。ずつと一貫してますよ。その大本は人間は皆んな凡夫だからということですよ。親鸞聖人のお書きになったもの読むと、私は親鸞聖人で「聖人」だけれど、あなたは凡夫だとそんなことはおっしゃっていませんよね。我ら凡夫とこうおっしゃっている。親鸞聖人は我ら凡夫と言ったから「聖人」と崇められているのです。俺が聖人だという人には誰も聖人としては崇めませんよ。

聖徳太子は、当時の地図に載っているか載っていないか分からんような東の端っこにある小さな国から大國の中國に手紙を出した。こちらが日出ずる國の天子で、あちらを日没する國の天皇だと言っているわけですから、向こうは怒るわね。でも堂々たる外交をなさった。その聖徳太子さまは決して聖ではない。必ずしも愚かではない。共に凡夫だ。どうですか。世の中の問題は、みんなそういうところに立ったらもつともつと良くなるんじゃないですか

ね。そういう点で改めて浄光寺さんのお太子さんは大事だと私は確信を持っております。

「和」ということもさきほどの「ご縁」という言葉も仏教に会わなかつたら起こってこないわけですよ。そうすると先程言った「勿体ない」や「お陰さま」や「いただく」とかそういう言葉も出てこない。私たちの日常の挨拶や生き方が変わってしまってますよ。そう思うと、親鸞聖人が「和國の教主」と仰せのように、和の精神を伝えていただいた。また十七条憲法の第二条に「篤く三宝を敬え」とこうおっしゃっている。三宝の一つは仏法です。当時の日本は仏教を知らなかった。それが朝鮮半島の百濟の國からお経と仏様が伝わった。これは計り知れないくらいの影響を私たちに与えていますよ。

二種の三世

私は今、鈴木大拙館でお世話になっていきます。おいでいただいた方はご存知だと思いますが、水鏡の庭というのがある。あそこのスペース

が一番広いですよ。私も毎朝出かける時、水鏡のゴミを拾って、あそこの柳を見ておる。毎日見ておると柳が芽吹いてくるんですよ。これが有り難いなと思つてね。冬の間、何も見えない。でも本当は前にちゃんとあるんだけど、私の目についてたのはつい二、三週間前で、それが一日一日芽吹いてくる。それから毎日考えている。柳はどうして春を知るのがか。

今日はお彼岸のお中日ですが、柳さんも桜さんもどうして春だと知るのがわからないけど、ちゃんと芽吹いてくる。ニユースを聞いているとアナウンサーが必ずこう言うのです。「暦の上では春だけれども、まだ寒い」と。人間は、暦の上では春だけれど、異常に暖かいとか、暦の上では春だけれど、異常に寒いとか、暦がなかったら何も分からない。でも柳さんも、桜さんも芽吹いてくるし、虫達もちゃんと土から出てくるんですよ。柳の言葉は分からないので会話はできないけれども、どうして春を知るのがか。間違えのない時にちゃんと芽吹いてくる。それから

しばらく色々調べました。日高先生の『春の数えかた』という本がある。どうして動物たちや昆虫がどうして冬眠から覚めてくるのか。彼らが数えるのは特別の寒い日とか特別の暑い日はカットして、ある一定のところだけを足していく。そして一定のところに来ると「ああ、もう春だ」と。それで私も柳と毎日対話してね。やっぱり柳の葉っぱがあっち向いたり、こっち向いたりしているのですよ。葉っぱひとつひとつがそれぞれの方角で太陽の光を受けているわけですよ。これはなんと素晴らしいものかと思えます。

時間は、「過去↓現在↓未来」とこうなっていると決まっている思っているわけです。仏法では必ずしもそうではない。仏法では時間とは実体的なもの。今という時が大事なんですよ。今ここにこうしているということがとても大事なんだけど、それだけでは凡夫はなかなかいだけないから、「過去↓現在↓未来」という。

もう一方、先ほどの桜の話でいっ

たら、桜さんの最初の芽を結ぶのは、前の年の夏にもう芽の元ができていくというのですよ。そして冬の間に蓄がある。私は春になって暖かくなったら急に蓄がポツと開くのだと思っていたら、全然違う。先ほど言ったように、三寒四温の極端な温度差をカットして自分の都合の良い時間を足していくというのですよ。そんなこと全然知らなかった。段々桜を尊敬いたしましたして、今年は桜を見た手を合わせんなんと思っておる。柳を見ておつても、どうして柳さんは気づくのか。そうしたら柳さんが私の善知識のように思えてきた。大拙館の水鏡のところで柳を見てなかつたら、そんなこと考えもしなかつたんだけれども、それを見てから「ああ、なるほど」と。

そして水鏡の水も凄いですよ。これは絶対の平等ですよ。絶対の水平を保っている。こちらに一〇〇度のお湯を入れて、あちらには水を入れても、しばらくすると必ず温度は一定になりますよ。本当は合わせたら五〇度になるけれども、今日は熱い水の方が力があるから五五度にし

ておこうかなんてことは絶対にない。全部がすつと同じ温度になる。水、これは放つといっても必ず水平になる。人間がやればどれだけやってもどこかで傾いてしまいます。熱い水と冷たい水と別れておらんですよ。

お太子さんは、そういうような絶対平等、絶対水平の世界、そういうものが和だといわれた。それは如来さまに会わなければそういうこととは絶対に出来んというっておるのですよ。俺は偉いからと命令したら人は反感や反発を持ちます。しかし自然界の流れというものは、水も桜も柳も、みんな自分のはからいを超えたところでやっておるわけですよ。

時間の話ですが、仏教ではこう思っている。「過去↓現在↓未来」と「未来↓現在↓過去」。仏法の中に両方説いているのですよ。では時間が二通りあるのかといったら二通りなのですよ。

「未来」、文字通り「未だ来ない」のでしよう。桜が必ず花咲くとしたら、桜が蕾の時はまだ花が咲かないから未だ来ない。自然界の放っておけば必ずそう流れて行く時間。それが「未来↓現在↓過去」。生まれて間もないヨチヨチ歩きの子供、あれは未来なんです。やがて大人になるんですよ。やがて高齢者になるんですよ。これも自然の流れ。だから赤ん坊は、いつまでも赤ん坊のはずがなくて、未だ大人になっていない状態。未来というものが前にあって、やがて歳をとって大人になって、そして年老いて老病死となっていく。これは自然の流れ。生老病死。

ではなぜ私たちの周りでは、「過去↓現在↓未来」と時間をいうのか。これは聖徳太子さまの『三経義疏』さんぎょうぎしよの中にも書いてあります。「善悪業報の次第」と書いてある。善悪、行い



によつて結果が現れてくる。犯罪を犯した人が仮にいたとすれば、やがてそれが発覚します。発覚したらそれを償いをしていかなければいけない。過ぎ去つた行為が現に表れてきます。そして未来に結果が業報というものがやってくる。だからこちらの方は善悪業報の次第とこういつておる。そういうことを教えるために「過去↓現在↓未来」という時間の流れがある。お経の中にも「過去↓現在↓未来」と書いてあるのは私たちが今、前にやったことに気がつかないからです。「行業果報 不可思議」(『仏説無量寿経巻上』・真宗聖典二九頁)とお経の中に出てくる。「行業果報」といつたら自分で気がつかないのですよ。なんでこんなに腰が痛くなるのだろう。それには痛くなるだけの理由がやっばりちゃんとあるのですよ、過去に。でも気がつかないものだから、なぜ私だけがこんな目に・・・となるのです。そういうことを知らしめるために「過去↓現在↓未来」の時間の流れを教えた。

でも、おばあちゃんが段々若返って来るといふようなことはないわけです。必ず未だ大人にならない子供たちが、やがて大人になって、そして年老いていく。そういうことを知らせるために「未来↓現在↓過去」ところなる。ですからこっちは法の姿、法相生起の世界。桜さんが競争して、俺が早く咲いてやろうとそういうことはないですね。暖かくなれば自然に咲くのです。柳の芽は自然に芽吹いてくるわけです。それは法の世界に、法のまま生きていくわけです。しかし、私たちは「私が私」と、必ず「私」という「我」と「我所」、私を所有しておる。

「私の手」と「仏の手」

鈴木大拙がアメリカで生まれた二世の岡村美穂子さんという十五歳のお嬢さんと出会った時に、「この世の中は何なのですか。私はこんなに一生懸命やっているのに報われないう」とかいろいろなことを言つて先生に口説くわけですよ。そしたら先生が「美穂子さん、手を見せなさいよ」と言つて、手をとつて「あなたの手、綺麗な手じゃないですか。これ仏の手ですよ」と言つたのです。仏の手と言われても、これ自分の手だと思つているから、私の手、私の命、私の身体です。みんな我と我所に囚われてる。十五歳のお嬢さんが大拙先生からニューヨークで「綺麗な手じゃないですか。これ仏の手ですよ」と聞いて、先生と別れて帰りの電車で自分の手をじつと見て、仏の手？ いや私の手としか思えなかつた。それで翌日また先生のところに行つて、「昨日、仏の手と言われたけど、どこが仏の手なのですか」と言われた。そしたら、先生は「あなたの手？ これはあなたを作つたのですか？」「あなたのお母さんが作つたのですか？」「あなたがお父さんが作つたのですか？」と自由な動かし方。それが仏の手なんですよ」とおつしやつた。

それが法の世界というもの。自然界の柳の芽にしても、桜にしても、はからいがなければ分別もない。咲かないうちは未来だけれども、やがて春になれば現在して花が咲いて、それが過ぎれば桜の花も自然に散つていく、それが「未来↓現在↓過去」といふ時間の流れ。それが法の相ありとあらゆる自然界の姿が生起する姿を表せばこういう風になる。

もう一方の「過去↓現在↓未来」の時間の流れでは大本は過去にあるでしょう。業報。やつた行いの報いりますよ。さらに飲み続けたら健康を害しますよ。ということをおるんですよ。時間の流れ、三世ということ、一つをとつてみても、仏法は尊い、その大本を作つていただいたのはお太子さんですよ。

二種の生死

皆んな生まれて、老いて、病気になるって、死んでいく。生老病死。でも私たちは、生老病の「死」を外したものが自分の人生だと思つて居るんですよ。生まれてから死ぬまでの間が自分の人生だと思つておる。でも、生も死も私の人生なんですよ。でもそういうことに気づかないから、知らんけどいつの間にか生まれとつた。そして死にたくないところ

う思っておる。生と死の間、生まれ
てから死ぬまでが自分の人生だつた
ら間に何があるかといったら、歳を
取っていくのと、病気になるのしか
ないじゃないですか。生も老も病も
死もみんな私の人生。だから聖徳太
子から伝えていただいた仏法の中に
生死、私たちの生き死にというもの
についてきちんと伝えてくださって
いる。二通りあります。

一つは分断生死。もう一つは
不思議変易生死。『三経義疏』の中
に書いてあります。「不思議」とは私
ちが見たり、聞いたり、目で見たり、
触ったりできないということ。私た
ちでは考えることが出来ない。私た
ちの知恵では分かんぞといてい
るのが不思議。「分断」とは思議でき
る。私は何歳ですよ。あなたは何歳
ですよ、と階段を一つづつ上がって
いくように分けていく。一方、「変易」
とは徐々に変わっていくことをい
います。

歌人に斎藤茂吉という人がいまし
て、そのお母さんが亡くなった時に
こういう和歌をつくっておる。「いの
ちある人あつまりて、我が母のいの

ち死行を見たり死ゆくを」。死に行く
のですよ。私もよくお通夜へ行くけ
れども、その時はご遺体でもう亡く
なっている。死に行くのではなくて
亡くなった方に会っておる。

昔は皆んなそうだったんですが、
茂吉は自分の母親の死に行くを、生
から死への変化を皆んな見ておった
のですよ。亡くなりました、ご遺体
ですというのとは全然違う。生きて
いる方、死んだ方と分かれていない。
死に行く変化をずっと目の当たりに
しておる。

今夜は浄土に詣らせてもらう

私が感心した人の生き方を皆さん
に是非ともお伝えしたい。それはね、
石川県金沢市の方が書かれた文章。
これもね、よくぞ私の前にこの文章
が現れてくれたと思つてものすごく
感動しているのです。金沢市の高田
俊彦さん、その人の曾祖母、ひいお
ばあちゃんの亡くなる時の様子を短
い文章に書いてくれた。私はそれを
読んだ時にね、いたく感動感激した
んですよ。このおばあちゃんが仏法
をいただいて、こういうふう往生

できたということは、大本を辿れば
蓮如上人、親鸞聖人。しかしその元
はやはり和国に仏法を伝えていただ
いたお太子さんではないかと思うの
です。そこにはこういうふう書いて
ある。

曾祖母は、よみさんという。亡く
なったのは昭和二十八年の四月に
九十歳で亡くなった。村の中では最
高齢者であった。その時自分は高校
二年生だった。自分にとって物心つ
いてからの最初の家族の死であつた
が、その時の様子を還暦を過ぎてか
ら高校二年生の時にひいおばあちゃ
んの往生に立ち会つたことを書いて
いる。

いつものお寺詣りに出かける時と
同様に何かいそいそと死を迎えた。
あの晩、能登の春にしては暖かかつ
た。よみが隣の部屋にいる私を呼ん
でいるのに気づいたのは夜の十時頃
であつた。「おばあちゃんは今夜間違
いなく浄土に詣るよ」。自分の寝てい
る藁布団の下から大切にしていたお
胴巻き(財布)を引き出させて、取っ
て置けと私に合図する。息をついで、
お前は一番年上だから妹三人の手本

になるようにしなさい。家は貧乏だ
けれども僻むことはなんにもないん
だ。お父さんとお母さんを大事にし
なさい。普段と何かちよつと違うな
と思つていたら、こういうことを自
分に言つた。「死ぬということは少し
も特別なことではないがやぞ」。「人
は阿弥陀さんのところから来て、ま
た阿弥陀さんのところに帰る」。「浄
土ではみんな一緒になれるがや」。論
すようにゆつくりと話す。

しばらくしてよみは母を呼べとい
う。藁ぶとんに半ば身を起して、母
の手を自分の両手で包んだ。そして、
「もうそろそろ浄土へ詣らせてもら
う。あねさに一言礼が言うとうてね。
あねさはおらの子ではない。孫でも
ない。孫の嫁や。それながにこの婆
をよう世話してくれた。本当に大事
にしてくれた。いつも湯タンポやつ
た。皆がイワシを食うとき、この婆
だけカレイやつた。ひ孫の四人の子
供も、この婆を大事にせよと、良く
しつけてくれた。有難いこと、有難
いこと」と礼を繰り返す。

母は、よみの耳に口を寄せて、父
が兵隊に取られた留守中には特に婆

さまに力になってもらったこと、他村から嫁に来た母をかばってくれたこと、四人の子供の子守りのこと等、よみに重ね重ね、感謝の心をのべている。

母は、よみの子で存命の一男二女が折角近くに住むのだから呼びに行くという。しかし、よみはそれを目で制した。「子供とて、もう七十歳を過ぎた者たち。どうせ、すぐ浄土でいっしょや」。

く さ む す び

お互いに有難うと、感動する場面ではないですか。そしてその後が私はまた感動したんですよ。お母さんがよみのおばあちゃんに、近所に住むおばあちゃんの一人の息子さんと二人の子供たちを呼びに行く。そして二人のおばあちゃん呼びにいかんでもいい。子供といっても七十を過ぎたものたちだ。すぐに浄土で一緒やさかい。言えますか？浄土で一緒になることを確信しておるわけです。寸分も疑っていない。俱会一処、浄土で必ず一緒になる。

「さあ、一足先に詣らせてもらうさかい、浄土で待っているさかい」とおばあちゃんはそう言われた。昭和

二十八年、そんなに昔ではない時代の金沢の地にこういう信心獲得をしてお寺詣りと同じようにいそいそと死を迎える方がいらした。私は大変な感動をした。自分に引き寄せたらそんなことはとても出来ないじゃないかなと思ってお話をしているわけです。

「さあ一足先に参らせてもらうさかい、浄土で待っているさかい」。よみと母と後に入ってきた父と一緒に三人で「なむあみだぶつ」と念仏を称えた。よみの念仏が止み、深い息をした時に、「婆さまが詣らしたぞ、さあ仏壇にお灯明をあげよう」と父の声がして母と私たち四人も父に従って深夜の勤行が始まった。

親鸞聖人も九十歳、世辞を交えずただ念仏され、やがて念仏の声が絶えて往生された。このおばあちゃんもまさしくそう。そして当時高校二年生だった俊彦さんが六十二歳になつておる。自分の父は八十七歳。よみのような死を迎えることができれば、そんな思いが父に通じるだろうか。とこう書いてあるんですよ。私もつい二週間ほど前に叔母がな

くなった。携帯電話が鳴って病院で叔母が亡くなったという。先ほどの斎藤茂吉のような「いのちある人あつまりて我が母のいのち死行を見たり死ゆくを」という場面にはなかなか会えない。このおばあちゃんは自分で「今夜間違ひなくお浄土に詣る。死ぬということは何にも特別なことではないんやぞ」と。その時の高校生が還暦を迎えることになつてもおばあちゃんの往生の場面がなんとも印象に残っていて、自分の父親も八十七歳だけれどもよみのように往生できたらいいなと書いていただいておる。これを読んで私も世話になつた人が沢山いるから「ようしてももうた、ありがとう」と往生ができたらいいなと思うけれども、どうなりますか。

こういう方がほんの六十年ほど前に金沢にいらしたことに非常に感動して、浄光寺さんにお参りしたら、仏法を日本に伝えていただいた聖徳太子に対する恩徳廣大と共に、この仏法の中に生きていく人が現にこうしていらしたということを是非お話したいと思つて今日寄せていただい

たのです。このおばあちゃんの生死は、一体になつておる。生死不二。これを不思議変易生死というですよ。まあ、そういう方がいらしたということに気づく、思いを寄せるということも大事なことで私は思っています。そして私たちが仏法にお会いにできることはお太子さんの恩徳だということに気づかせてもらおう。それが今日の浄光寺さんのお太子さんの尊い意義ではないかと思うわけです。今回のご縁はこれ位にさせていただきますかと思ひます。ありがとうございました。

《講師紹介》

木村宣彰（きむら・せんしょう）

一九四三年生まれ。奈良市在住。報土寺住職（南砺市城端）。大谷大学学長（二〇〇四年～二〇一〇年）退職後、同大学名誉教授となる。二〇一三年四月、鈴木大拙館館長に就任。

◇本文は平成二八年三月二十日、浄光寺「お太子さん」の法話録であります。海に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきます。

「お太子さん」のご案内

日時 三月二〇日（祝日）午後一時～
講師 木村宣彰師（鈴木大拙館館長）